説経「しんとく丸」の構造

生井武世

説経「しんとく丸」を論じようとするとき、この作品を語り歩いた歴史的実在としての語り手＝荷い手の存在を看過することはできない。これまでの研究史がすでに明らかにしているように、荷い手の実像に迫ることで、説経の世界の混沌が大幅に解き明かされてきたことは、貴重な成果として受け止められてしかるべきである。しかし、そのような研究の成果に学びつつも、荷い手の生活や意識のみを重視することは、ややもすると、その直接的な反映を作品の世界に確認することに留まってしまう傾向に陥り、その結果、作品論として取り上げる可能性を閉ざしてしまう危険性をともなう。むろん、荷い手の生活や意識の問題は、作品の成立の基盤、背景として、十分に追究されなければならないが、その追究が、ただちに作品の世界を決定づけ、形成している構造の解明につながらないことも事実であろう。説経「しんとく丸」の文学性を考えようとするとき、作品の構造を全体的に決定している方法や構想こそが、もっと追究される必要がある。その作業を通じて、荷い手の実像もより鮮明な像を結んでくる側面があると思われる。

小稿では、荷い手の問題をいったん視野からはずして、作品そのものを可能なかぎり分析し、説経「しんとく丸」の構造に迫ってみたい。

(1)　「道行」の方法

説経「しんとく丸」は、信吉長者夫婦が清水の観音に「申し子」の祈誓をするために都に上る「道行」を発端に、天王寺におけるしんとく丸と乙姫の対面をはさんで、二人がともに都に上り、清水寺で「異例」の回復を果たす終息まで、全体が「道行」によって貫かれている。この間に、実母の死後、継母がしんとく丸を呪詛するために都に上る「道行」、そのために「異例」を受けたしんとく丸を、郎党の仲光が天王寺に捨てに行く「道行」、捨てられたしんとく丸が観音の導きによって熊野へ向い、それに重層するように後を追って行く乙姫の「道行」が、量的にもかなりの部分を占めてつぎつぎ

と展開される。この他に、地名を並べ立てて行く詞章の様式をふまず、簡略に「いそげばほどなく着きしかば…」[①]といった形で処理されている部分として、しんとく丸の〈信貴のの寺入り〉や、仲光が商人に身をやつして恋文の使いとなり、乙姫の元に行く箇所などをあげると、ほぼ全体が「道行」によって被われてしまう。

このような「道行」の多用はいったい何を意味するのだろうか。かつてこの作品を語り歩いた荷い手の旅に生き旅に死んだ境涯が、素朴に反映していると見ることは短絡にすぎよう。なぜなら、物語の発端から終息に至る主要な結節点、つまり、展開の節目になるできごとのことごとくが、「道行」の直後に位置しているという単純な事実を見るとき、「道行」は、この作品の方法そのものであり、構想の次元に深く係わった位相を示していると見られるからである。「道行」が時間の推移と空間の移動とを連続的に果たす機能を持つことからすれば、物語の結節点がその過程に位置することは、ある意味で当然である。しかし、この作品の場合、時間と空間とが静止的に場面として切り取られながら、常に「道行」をともないつつ、全体的には流動する相においてとらえられている事実は重要である。このことは、物語の展開の上では、「道行」が前提となって、結果＝結節点をもたらすという形をとることを意味するからである。作品に沿って具体的に指摘してみよう。

しんとく丸の誕生は、発端の父母の「道行」の後に、「この子生まれ七歳になるならば、父にか、母にがな、命の恐れあるべきが、あけすけ好め」という、観音の条件つきの夢告によって果たされた。実母の死後、しんとく丸が「異例」になったのは、実子の乙の二郎を総領にしようとした継母が、「道行」の後に、「さて今日よりも、乙の二郎を、氏子に参らする。その上は、信徳が、命を取ってたまわれと」観音に祈誓し、都の神社に百三十六本もの釘を打った結果であった。「異例」のしんとく丸が「乞丐人」としての境涯に転落したのは、継母の強迫によって信吉長者が仲光に命じ、参詣を口実にした「道行」の後に、しんとく丸を天王寺に捨てさせたからであった。さらに捨てられたしんとく丸が、「たとい熊野の湯に入りて、病本復したればとて、この恥を、いずくの浦にてすすぐべし。天王寺へ戻り、人の食事を給わるとも、はったと絶って、干死せん」と、天王寺の引声堂の縁下に籠もってしまったのも、熊野へ向う「道行」の途中、近木の庄の乙姫の館で恥辱を受けたからであった。そうして、最後にしんとく丸の「異例」が回復するのも、乙姫が「あしきとき添うてこそ、夫婦とは申そうに」と、しんとく丸の後を追い、熊野への「道行」の後に天王寺で対面し、ともに都に上る「道行」を経て、観音の夢告によって得た鳥箒で乙姫がしんとく丸の体を撫でたことによっている。

物語の流れを逆回転させたにすぎないのだが、このように、高安の郡と近木の庄を起点にし、天王寺を拠点としながら、清水寺・天王寺・熊野路へと、長者夫婦、継母、仲光、乙姫、しんとく丸によって放射状に繰り返される「道行」は、そのつど主人公のしんとく丸の情況を一変させ、物語の結節点をもたらす。つまり、「道行」を経るごとに物語は展開するのであり、しんとく丸の流浪と蘇生を語ろうとするこの作品の主題は、あきらかに「道行」によって荷われていて、その意味で、「道行」は方法そのものであると言えるのである。

このような「道行」の方法の採用を可能にしている構想を見きわめるためには、この作品における観音の位置と清水寺が示している位相とに着目しなければならないだろう。主人公のしんとく丸は清水の観音の「申し子」であり、観音にとっては、本文中のことばで言えば「氏子」であった。また、しんとく丸が実母に死別し、継母の呪詛によって「異例」になる背景には、観音の意志が働いていた。さらに、捨てられたしんとく丸が乙姫の館で恥辱を受け、「干死」の覚悟をしたのも、観音の導きによったものであり、最後に「異例」の回復をとげるのも、すべて観音の力によるものであった。つまり、この物語のモチーフのすべては観音の手の内にあり、観音は主人公しんとく丸の境涯のすべてを決定し続ける力を保持している。そして、その力の強大さは、時に観音とその「申し子」という、本来的な関係を犯してまでも貫徹され、はなはだ矛盾した様相さえ見せる。たとえば、しんとく丸が観音の「申し子」であり、「氏子」であるにもかかわらず、観音は継母の邪悪な祈誓を受け入れて、しんとく丸を「異例」にする。また、捨てられたしんとく丸を、「この所の有徳人が、御身がようなる乞食に、施行を出いてお通しある。参りて施行を受け、命を継げ」と、乙姫の館へ導いて、恥辱を与え、さいなむ。このような、矛盾に満ちた、しんとく丸をもてあそぶような所行は、物語の終息部で観音自身の口から語られているように、観音が無責任にも「人の頼むに頼まれよ」と考えたことによるのである。その結果招いた事態についても、観音は「磨をさらに恨むるな」という、まったく弁明にもならない弁明で済ませてしまっている。少なくとも、観音がなぜ継母の祈誓を受け入れたのか、また、なぜ乙姫の館に故意に導いたのか、この二点に関する納得のいく説明は本文の表現上からは得られない。しかし、この点にこそ、実はこの作品の構想を解き明かす端緒があるのではなかろうか。

観音の意思はすべてしんとく丸が「異例」を一身に負って、流浪し、蘇生するという、この物語の主題に向って発動している。その意志は、いわゆる三十三に身を変じて衆生を救うという、広大無辺の慈悲の方向には働かず、逆にしんとく丸をより苛酷な境涯に落と

す方向へ決定され続ける。つまり、物語の終局においてしんとく丸の蘇生を語るために、その条件づくりの役割を観音が果たしているのである。そのために観音は、先に述べたような矛盾を犯してまでも、しんとく丸をみずからの手の内から逃すまいとしているのだ。このことは、当然のことながら、清水寺における観音の夢告によって始発した物語が、ふたたび同じ清水で、観音の夢告によって終息するように、すべてを予定調和的に仕組もうとする意図と連動している。観音が天王寺に捨てられたしんとく丸を、「御身がようなる異例は、これより熊野の湯に入れ。病本復申すぞや。いそぎ入れや」と、熊野へ導きながら、その前言を翻してまでも、熊野路の途中から乙姫の館へ導き、天王寺へと連れ戻しているのは、天王寺がこの説経の荷い手の重要な拠点であったことを窺わせるとともに、物語の上では、しんとく丸を予定調和的に清水寺へ向わせるための処置である。物語の表層における観音の力の誇示は清水寺がしんとく丸の最終的な蘇生の地であることを語ろうとする意図の現われでもある。

説経「しんとく丸」は、その構想の頭初から、清水寺に始発し、清水寺で終息するという、いわば円環をなす時空を意識して発想されている。そこに流れる時間は無秩序であり、空間は飛躍するが、全体としては円環をなしながら神話的時空とも言うべき世界を形成している。そして、この世界を支えているものは物語の表層においては観音信仰の力なのであるが、本文中でしんとく丸が「氏子」と呼ばれていることからも、内実においては、それに対応する「氏神」にあたるような、ある根源的な存在の力であると思われる。[2] その存在の意志にもとづいて、この作品が神の出現を語ろうとする意図を秘めており、その語ろうとする方法が清水寺と観音とを必要としているように見える。この点については後に述べるとして、ともかく、先に触れた「道行」の方法が、この円環をなす時空に支えられた構想を、表現の次元に浮上させるに際して、有効な方法として機能していることを指摘しておきたい。

(2) 「申し子」譚の意味

清水の観音の夢告によって始発した物語が、ふたたび清水の観音の夢告によって終息するという構想は、円環をなす時空の意識に支えられている。そして、この円環をなす時空を横切って行く主人公のしんとく丸が「申し子」として設定されていることは、その流浪という点に関連して、「道行」の方法が表現しようとする、この作品の本質を暗示していると思われる。

多くの異形童子と同様に、「申し子」の多くもまた異形であることによって、神の子としての存在を表象する。そして、この異形性

のゆえに迫害され、流浪するのは、「申し子」が神の子でありながら、他方では祈誓という形で神の意志を左右した人間の罪を背負って誕生してくるからであろう。つまり、神の司る領域からまさに申し降りした幼神としての「申し子」は、人間の側から言えば、神に対する浸犯を通じて授かった子であり、自身が罪を負い、災厄を荷うと同時に、周囲に災厄をもたらす存在でもありうる。説経「しんとく丸」の場合に即して言えば、まず母の命が奪われ、次にしんとく丸が「異例」の身となって捨てられて、やがて父の信吉長者が没落するという物語の形象の基層において、実はしんとく丸の「申し子」としての神性が語られているのではないだろうか。

しんとく丸は、子供がないことを除いては「なににつけても不足なること」のない信吉長者夫婦が、清水の観音に懸命に祈誓して得た子であった。頭初、前世の所行を理由に、観音から子種を授けてもらうことを拒絶された夫婦は、観音を恫喝さえして、生まれてくる子が七歳になったとき、夫婦のうちどちらかの命に危険が伴うという条件を附されて、やっと子種を授けてもらう。こうして、「宵にもうけ、明日はむなしくなるとも、子だね授けてたまわれ」という、切実な願いがかなえられた瞬間から、長者夫婦はまぬがれ難い災厄を抱え込むことになる。しかし、しんとく丸が七歳を過ぎても父母の命に別状はなかった。しんとく丸は「信貴のの寺」で学問を

修め、「師匠のかたより、一字とひけ(きか)ば二字と悟り、十字を百字千字と悟り、寺いちばんの学者とおなりある」という、「申し子」らしい異才ぶりを発揮し、天王寺で稚児の舞の舞手を務めて乙姫と出会い、郎党の仲光の仲介によって彼女との恋も成就する。母の死はこのような信吉長者一家の幸福の絶頂期に突如としてやってくる。あまりの幸福に驕りの生じた母は、「あの信徳丸を、清水の御本尊に、申し降すその時に、あの子三歳になるならば、父か母がな、命の恐れ有るべきと、仏勅なるに、三歳五歳過ぎ十三になるまで、父に母に難もなし。かほど、らせ(はやらせ)たまう清水の御本尊さえ、うそをつかせたもうなり。当代の人間もうそをつき、世を渡り候えや」と、不用意なことばを発する。この驕慢が観音の怒りをかって、母はたちどころに命を奪われてしまう。

この母の観音に対する冒瀆は、浸犯という意味において、「申し子」の祈誓と同質の行為であり、いわば母は瀆神の行為の積み重ねによって命を奪われるのである。そして、重要なことは、この母の死を契機にして、信吉長者が没落し始め、父としての力を喪失していくことであり、それに平行する形で、しんとく丸が災厄を一身に背負い込み始めることである。その具体的な形象が「継子」としての設定を必然とし、「継母」を必要とするのである。

物語の表層においては、継母は実子である乙の二郎を惣領にする

ために、清水の観音の御前の生木に十八本の釘を打ったのをはじめ、都の神社に合計百三十六本もの釘を打って、しんとく丸を呪詛するのであり、その結果しんとく丸は、「百三十六本の釘の打ち所より、人のきらいし異例となり」、にわかに両眼がつぶれることになっている。しかし、この身に受けた「異例」が原因で父に見捨てられ、天王寺に捨てられて、しんとく丸の流浪が開始されるという後の展開からすれば、継母はしんとく丸の身体に異形性を付与する任務を帯びているのであり、それが物語の基層における継母の唯一の存在理由である。佐渡七太夫豊孝正本では、継母は乙の二郎とともに結末において首を切られるが、これは物語の表層における、いわば倫理的な決着であって、本来ならば邪悪な祈誓をした罪が身に報いてしかるべきであるのに、そうはならない。それどころか、継母に願いをかけられた観音が「人の頼むに頼まれよ」と、いともかんたんに「氏子」であるしんとく丸を見捨ててしまう奇妙な形象からも、継母の役割が頭初からしんとく丸に異形性を付与することにあったことが知れるのである。

母の死はそもそも「申し子」であるしんとく丸の存在自体がもたらした災厄であるが、同時にそれはしんとく丸が災厄を身に引き受け始める契機にもなっている。そして、継母はしんとく丸が災厄を荷う存在としてふさわしい外観の異形性＝「異例」をしんとく丸の身体に実現させるべく登場してくるのであり、観音の意向もその目的に沿って決定されている。この意味で、「継母」はもう一人の母なのであり、母も継母もしんとく丸を災厄を荷いうる存在に転身させる補助者なのである。「作品内的存在としての語り手」に着目し、〈表現―構造〉という概念の規定にもとづいて、しんとく丸を災厄の神としてとらえた桜井好朗氏は、この点について「かかる神の発現を、生母は自己の死によって、継母は姦計によって、促進しているわけであり、両者の存在なくしては、神としてのしんとくはあらわれようがなかったのである。物語において両者は正反対の位置にあるが、構造的には共通した機能をあたえられている」と述べられている。③まさに本質をついた指摘である。円環をなす時空に支えられた構想が「道行」の方法によって形象化されるとき、物語の発端において、主人公のしんとく丸が「申し子」として設定されることは、その流浪の創出を約束する。母も継母も、さらには観音も、その目的に向けて動員されているのである。そして、父の信吉長者は、ほかならぬそのしんとく丸の流浪の終結を告げる存在として、登場してくる。

信吉長者の没落の理由については明瞭に語られてはいない。御台の死後、長者は継母の言いなりになり、離縁を迫られて、しんとく丸を捨てることを決意し、その実行を郎党の仲光に強要する。かつ

て子供の誕生を観音に祈誓したときのすさまじい恫喝に見られたような活力を、長者はすっかり失ってしまう。物語の終局に至って再登場してきたとき、彼はすでに「人を憎めば、身を憎む。半分は、わが身に報いて、御ざあるなり。継母の母の、形へは、報わいで、信吉殿に報うてあり。両眼、ひっしとつぶれてに、これはこれはとばかりなり」と紹介され、「丹波の国へ浪人」という境涯に置かれている。この長者の没落の理由は、逆のぼれば、母と同様にかつてしんとく丸を神の手の内から申し降すという祈誓を通じて、瞶神の行為を働いたことに求められるし、その上に、継母の強迫に負けて、「あの妻送り、余人の妻を頼むとも、姿こそ変るとも、心邪慳は同じこと、捨てばや」と、「異例」のしんとく丸を捨てたことに求められる。つまり、長者はみずから申し降ろした「申し子」をみずからの手で捨てるという、二重の瞶神の行為を働いたために没落するのであり、彼の活力の喪失はこのことを語るための布石であった。長者の没落は、つきつめて言えば、やはりしんとく丸の存在自体がもたらした災厄であり、長者は母や継母と同様に、しんとく丸を災厄を荷いうる存在に転身させる役割を果しているのだが、ただ長者の場合、神罰を蒙るという形をとって、みずからも災厄を荷って生きる姿を曝している点を見逃してはならないだろう。

佐渡七太夫豊孝本の結末部では、神罰が我が身に報いたために両眼がつぶれ、乞食となっている信吉長者が、我が子のしんとく丸の施行とは知らずに、「疲れはて、飢えにおよびしに施行を賜べ」と物乞いに出てきて、衆目に羞態を曝し、嘲笑をかう。長者は「出ずまじものを、出でてもの憂きわが身や」と、深い恥辱感にさいなまれてその場を逃げ出す。この場面における信吉長者の姿は、かつて近木の庄で乙姫の館とは知らずに、観音の導きのままに物乞いに行って恥辱を受け、「たとい熊野の湯に入りて、病本復したればとて、この恥をいずくの浦にすすぐべし」と、「干死」を覚悟したしんとく丸の姿に、そのまま重なり合う。しんとく丸は、恥辱に耐えかねて逃げ出した長者に、「のう父御様、信徳参りて候」と抱きつき、乙姫が観音の夢告によって授かり、しんとく丸が「異例」を回復してもらった鳥箒によって、「善哉なれ平癒」と、父の盲いた両眼を撫でる。こうして長者は開眼するのだが、この場における長者の体験も、かつての清水寺におけるしんとく丸の体験と同一である。ただ、鳥箒を握って撫でる人物が、乙姫ではなく、しんとく丸である点だけが異っているだけだ。

こうして、信吉長者はしんとく丸と同様の体験をふんでいくのだが、このことは、彼が災厄を一身に引き受け、その異形の身を衆目に曝すことによって培った、資質と能力とを、この場面において発揮していることを示している。物語の終局における信吉長者の処置

は、長者がしんとく丸の実の父親であるという関係上、その倫理的な裁きの形が継母の場合とは異なる形になっているわけだが、実は単にそれだけのことだけではなくて、物語の基層においては、「申し子」としてのしんとく丸の神性を語っているのであり、幼神の成長ぶりを証拠だてるためにあるのである。

円環をなす時空に繰り広げられる物語は、しんとく丸という、災厄をもたらし、荷い、そうして払うことのできる存在へと転身していく、神の子の一代記を語ろうとする意図を、その基底に秘めている。しんとく丸が「申し子」として設定されている必然性も、この点にあったのであり、幼神の成長という道筋において、父母も継母も、さらには乙姫も位置づけられ、形象されているのである。

(3) 観音と乙姫

説経「しんとく丸」の時空はよどみなく連続しているわけではない。全体的には清水寺から清水寺へという円環をなしてはいるが、その過程においては、時間は停滞し、断絶しているし、空間はその時間に即して切り取られ、飛躍を見せている。その結果、当然のことながら、物語は秩序だてられた時空の推移に従って必然的な葛藤を経て展開するという形にはなっていない。任意に選択された時空が、「道行」によって、いわば数珠つなぎにつながれており、無秩序な時空が非連続の連続といった形で、清水から清水へ、しんとく丸の誕生・流浪・蘇生という展開に沿って配列されている。そして、この配列を促進する役割を与えられて、作中に観音が存在していることが、この説経のきわだった特徴の一つである。

観音の意志がしんとく丸の境涯のいっさいを決定し続けていることについては、先に述べたとおりだが、このことは、別の角度から見れば、「道行」によってつながれるべき個々の場面を生み出す。長者夫婦による「申し子」の祈誓と誕生・実母の死と継母の呪詛・しんとく丸の発病と乞食・「干死」の覚悟・蘇生の場面、いずれも観音の意志の発動によって作り出された場面だが、これらが「道行」によって貫かれることによって、この作品の時空は形成されている。いわば観音は構想を支える円環をなす時空を保証しつつ、物語の展開の上では狂言廻し的な役割を果たすことで、この作品の世界の構成に深く関与している。逆に言えば、物語を構成していく方法上の要請が作品の世界における観音像を決定していることになる。観音が作中においてはなはだ矛盾した存在であるのも、根本的にはこの点に起因しているのであり、さらにこの作品が一見観音信仰にもとづく霊験譚のように見えながら、内実としてはそうでなく、「観音の霊験を語るといふやうな態度を保持している[4]」にすぎないのも、この点から説明がつこう。以前にも指摘したことがあるが、事実、観

音は「救済の手を差しのべるかのように顕現しながら、実際は信徳丸を手の内にもて遊び、恥辱感でさいなみつつ、絶望の極みへと導く役割を果している」[5]のであり、天王寺の引声堂の縁下に籠もって「干死」を覚悟するしんとく丸の姿には、あきらかに観音に対する不信と拒否の姿勢が貫かれている。この作品における観音の形象にはもはや衆生済度の能力は付与されていず、はっきりと加害者としての像を結んでいる。救済者としての能力は観音から離れて、乙姫の形象に、さらには乙姫の力によって蘇生した終末部のしんとく丸の姿に認められるのである。

岩崎武夫氏は、しんとく丸の「干死」の覚悟に至る絶望的な姿に、「観音の慈悲の力によっても、どうにもならぬ人間苦の世界があること、そのことの発見によって逆に観音の存在をいま一度たしかめ、信じようとする」語り手＝あるき巫女の複雑な眼が、「二律背反的な観音のイメージをつくり出したのであろう」と述べられ、「あるき巫女が担い、そして歩くという苦行性において、はじめて観音としんとく丸との間にある矛盾―断絶感は除去され、しんとく丸は蘇る」のであるとされて、乙姫の形象にある巫女の「職能精神（媒介の思想）」が象徴されていると説かれた。[6]乙姫の形象には歴史的実在としての語り手＝荷い手の投影があることは否定できない。その乙姫が本来観音が果たすべき救済者としての役割を果たしていることも事実である。しかし、この説経の担い手の人間苦を見すえる眼が、はたして先に見たような分裂した観音像を生み出しうるのであろうか。「観音の存在をいま一度たしかめ、信じようとする」方向でなされている形象にしては、この作品における観音像はあまりにも不信感をあおる存在でありすぎる。継母の呪詛を受け入れておきながら、「磨をさらに恨むるな」という、みずからの無力と無節操とを露呈している一点をあげるだけでも、そこに信頼の回路を見出すことは困難である。しんとく丸と観音との間には、乙姫の存在をもってしても埋めようのない断絶感が依然として残る。より正確に言えば、冒頭において信吉長者夫婦の「申し子」の祈誓に応じ、結末において夢告によって乙姫に呪具を与えるという点で、観音はかろうじて救済者としてのイメージを見せている。しかし、これとても中心部における加害者としてのイメージを払拭しきれるほどのものではない。むしろ後半部における乙姫の救済者の代行者としてのイメージを増幅させる方向に働き、その結果、しんとく丸との距離をよりいっそう感じさせるのである。なによりも、加害者としての像を結びつつ、狂言廻し的な役割を果たす観音像の形象は、観音に対する不信を前提にしてはじめて可能であったはずである。つまり、観音はこの作品において構想と方法上において「信頼」されているのであり、それ以上の存在ではないのだ。

ところで、このことは乙姫が代行している救済者が実は観音ではなくて別の存在であることを意味している。物語の基層に潜み、観音の背後に隠れている、ある根源的な神の意志を乙姫が実現し、しんとく丸を蘇生させていることになる。この問題について、桜井氏はまったく別な視角から、周到な手続きを経て、この作品が「清水寺の観音に対する『不信』とひきかえに、災厄の神＝しんとく丸の背後に、もう一つの神として観音を想定しており、そうした神々の神話をひそかにふくみこんでいる」と述べられ、「神話的な構造において、根源的な災厄の神の意志にもとづいて、地上に同種の神が実現するという主題を語る」ものだと説かれている。[7] 氏の説かれる「災厄神」の履歴がもうひとつよく理解できないのだが、[8] これまで進めてきた作品分析の結果から、構造上の問題からすればきわめて強い説得力があり、今は氏の説に従っておきたい。そして、観音の背後にそのような存在を想定してみるとき、実はこの作品における天王寺と清水寺との機能の違いが見えてくるのであり、語り物としての成立のしかたの一端が窺われることを指摘しておきたい。

この作品において、天王寺はしんとく丸が乙姫を見そめ、捨てられ、「干死」の覚悟をし、乙姫と再会する場所であって、物語の円環をなす時空の中心に存在する。この意味で、天王寺はきわめて重要な位相を示しているのだが、しんとく丸が乙姫に背負われて病を回復し、蘇生を果たすのは清水寺においてであった。この形は冒頭の観音の夢告による誕生と対応する形で設定されているために、ごく自然に思われやすいが、しかし、たとえば同じ説経の「さんせう太夫」において、腰が立たなくなったずし王が、この天王寺において回復する例を見ればあきらかなように、天王寺は聖なる領域として、蘇生の地としての機能を十分に果たしうる場所であった。事実天王寺は一種のアジールとしての機能を持ち、説経の荷い手の拠点の一つとして、蘇生の地としての信仰を集めていたことも明らかにされつつある。[9] 乙姫の形象に荷い手の投影があるとすれば、彼らが持ち運んでいた神の意志の実現であるしんとく丸の蘇生は、当然彼らの拠点である天王寺において果たされてもよかったはずである。それほどにこの作品における天王寺の位相には、荷い手の拠点に対する強い意識の反映が認められる。にもかかわらず、清水寺が蘇生の地として選択されなければならなかったのは、そこに荷い手の語りの「場」に対する意識の作用があったからであり、その結果、清水に始発し、清水で終息するという構想が要請されたからにほかならない。つまり、一定の普遍性を備えた場所を構想の枠組の中に組み入れることによって、この物語が、どこで、誰によって語られてもよい、語り物としての自立した世界を獲得し、聴き手との間に普遍的な関係を結びうる保証を求めたからであろう。同様の意味で、

観音もまた広大無辺の慈悲を垂れる姿に隠れて、加害者として狂言廻し的な役割を果たしつつ、新たなる神の出現を語るという、この物語の基層に秘められた意図の実現に一役買っているのである。

① テキストは荒木繁・山本吉左右編注の『説経節』を用いた。以下本文の引用はすべてこれによる。（ルビ省略―筆者）

② 桜井好朗氏は「災厄神」を考えている。「しんとく丸の世界」（『文学』第47巻11号、第48巻第1号）。この点については後述する。

③ (2)に同じ。

④ 和辻哲郎『日本芸術史研究』第一巻二七六頁。

⑤ 拙稿「代受苦者の風貌」（広川勝美編『神話・禁忌・漂泊』所収）二一九頁。

⑥ 「しんとく丸と母子神信仰の世界」（『さんせう大夫考』所収）一二九頁。

⑦ ②に同じ。

⑧ たとえば岩崎氏の言う「母子神信仰」、あるいは西部信綱氏が「長谷寺の夢」（『古代人と夢』所収）で言う「地主神」などとどう関連するのか、目下判断がつかない。

⑨ 岩崎武夫氏「天王寺西門考」（『続さんせう太夫考』所収）など。